

寮生活における留学生の異文化社会適応、人格形成、 言語習得に関する事例研究 —国際寮の教育的機能の可能性—

正宗 鈴香

1. はじめに

日本の大学で学ぶ留学生の居住形態の一つに大学寮がある。人間関係の希薄化が社会問題として指摘される今日において、大学寮は、生活費支援や厚生施設としてだけでなく、人格形成の場としての教育的機能を持たせることも求められるようになってきている（鈴木・元岡・桂 2012）。こういった社会背景もあり、大学側も寮を大学における教育プログラムの一部と位置付け、他者との交流を通じて人間的な成長をもたらす「教育の場」として捉えるようになってきている（山川 2013）。岩本・細谷（2005）を参考に、留学生の人間形成に寄与する第三者の活動を教育実践と定義するならば、そのもっとも代表的・典型的なものは教師による教室での教育実践であると言える。その周辺に、大学関連の教育実践として学修支援活動、事務スタッフとのやり取り、部活といったものがあり、大学の外では、地域で催される国際交流の場や個人での習い事の場、生活圏での買い物や例えば郵便局でのやり取りというように、教育実践は教育の専門家による計画的な実践からそうではない実践まで広義にわたると考えられる。こういった教育実践の全体系の中で、教育寮は大学教育に近い部分に位置づけられるものとして考えることができると思われる。

原田（2012）は、大学生の留学には、1）外国語の習得、2）異文化コミュニケーション・異文化接触および異文化理解の体験、3）青年期後期における人間的成長と自己形成の3点の目的と課題があるとしている。教育的機能を持つ大学寮は、こういった留学生の留学目的をより効果的に実現させる可能性を持つ場になることは間違いないであろう。江淵（1991）は、留学生と日本人学生が一緒に住む「総合主義」での居住形態が友人関係を構築するための交流を促進するには望ましいとしている。その一方で、文化的背景が異なる者同士が同じ空間を共有するだけでは良好な関係が実現しないことも多くの研究で指摘されている（横田 1991a、下田・田中 2007 他）。これらのことは、留学生と日本人学生が一緒に住む寮を提供すればいいという単純なことではなく（山川

2013）、留学目的を達成させるためのシステムや運用の構築が必要となってくることを示唆している。したがって、国際寮における留学生の生活や留学生と寮生との関わりを把握することは、寮教育を推進させる一助になると思われる。

本研究は、こういった観点から留学生と日本人がほぼ同じ割合で居住している国際寮を取り上げ、留学生の寮生活の実態の一端を解明しようとするものである。

2. 先行研究

これまで寮コミュニティでの留学生と日本人の対人関係に焦点をあてた研究はいくつか見られる。出口・八島（2008）では、日本人学生寮コミュニティの中で繰り返される留学生と日本人学生の対人関係構築のプロセスを考察した結果、個人レベルでは日本人との関係を築くことに成功しているが、集団レベルでは留学生は「他者性」をあらわにし、「距離感のある日本人学生集団」として集団に違和感を感じ、8か月目には留学生は日本人学生コミュニティへの不参加を表明していたと結論づけている。山川（2013）は学生寮における日本人と留学生の友人関係構築について分析するなかで、混合寮の〔ルールの共有〕〔空間の共有〕〔時間の共有〕という三つの調和された環境の中で「留学生と日本人」という関係から「友人同士」という関係に変化していく過程が明らかになったとしている。そして、この日本人と留学生が「友人同士」という対等な関係に変化していった背景に「寮のシステムの環境」が影響していることを指摘している。

原田（2012）は異なる言語と社会・文化の中で暮らす留学生活においては、社会文化的な諸側面で、不確実で不安定な要素を体験することが多く、心理的・精神的・健康的な不安に対処する方法として、ソーシャル・サポート（周囲のりびとからの援助）の果たす役割は大きい（Fortaine, 1986）としている。留学生から見たホームステイ評価を分析するなかで、ホームステイを外国語の習得、コミュニケーション能力、異文化接触、異文

化理解、異文化社会適応、人間形成と成長に適った場として有意義であるとしている。原田によれば、田中(2000)は、ソーシャル・サポート・ネットワーク(周囲の人びとからの援助網)の役割を主として「学業サポート」と「生活サポート」の2因子を見出し、「学業サポート」には、「日本語」「日本文化」「勉強」の項目が含まれ、「生活サポート」には「相談」「楽しむ」「物」「情報」といった項目が含まれるとしている。原田はホームステイにおけるホストファミリーと留学生との対人関係を扱っており、学生同士で共同体をつくる寮での対人関係とは形態が異なるが、ソーシャル・サポートという考え方は寮においても示唆に富むものと思われる。

石井他(2000:215)は異文化適応を「人が新しい異文化の要求に応え、生活環境と調和した関係を確立及び維持し、日常生活を無事に送れるようになること」と定義している。異文化適応には数々の研究(Lsygarrd,1955、Oberg, 1960、Bennett, 1986 など)¹から、幾つかの段階があるとされているが、寮というコミュニティにおいても異文化適応段階があることが推測される。異文化適応には対象文化の人々との接触が不可欠な要因であるが、Allport(1954)は「接触仮説」を提唱する中で、集団間の偏見や排外意識は、単なる接触ではなく、一定の条件を満たした接触経験を通して遞減されるとしている。その一定の条件を①双方の地位・立場が同じであること②共通の目的が存在すること③協力的依存関係であること④社会的・制度的にその接触に対して妨げとなるような要因がないこと、の4つとしており、多くの研究の結果、おおむね仮説を支持する結果となっているとされる(石井、長谷川2013)。

本稿では、本学の日本語プログラムに1年間在籍し、国際寮「グローバル・ドミトリー」で寮生活を送った留学生を対象に、寮で培われる対人関係、異文化理解・異文化社会適応、人格形成、言語習得とはどのようなものなのか、留学生の語りを通して明らかにすることを目的とする。さらに、こうした実態把握を通して寮の教育的機能の性格や特徴を考察し、大学寮を教室外での教育の場とする可能性を考える手がかりとしたい。

3. 用語の定義

本稿では、異文化理解能力をDeardorf(2006)が定義する「異文化コンテクストにおいて適切かつ効果的に対応できる能力」(ケイパー 2009:39)、異文化理解能力を構成する要素を、竹内(2012)を参考に、Byram(1997)が提起する“Intercultural Communicative Competence”モデルにおける①態度(attitude)、②知識(knowledge)、③比較、解釈する技能(skills)として扱う。また、「異文化」を国や使用言語、民族性などの大きな違いを指すのではなく、個人レベルで相手に感

じる立場の違い、解釈、コミュニケーション・スタイルの違いといった「異文化性」(石井2013)を含めた意味で使用する。

4. 麗澤大学グローバル・ドミトリーのコンセプトおよび学び

4-1 コンセプト

中山(2014)は、本学の寮生活を、共同生活を通じて自己の品性を向上させる場であり、高いモラル意識によって自己を律してゆく自治制が根本のコンセプトになっているとしている。グローバル化が進む現代において、世界の人々から信頼される品格を身につけた人材の育成が大学の教育理念の柱となっており、グローバル・ドミトリーはその一翼を担うものとして位置づけられている。「グローバル・ドミトリー」²(以下、「」なし)はGlobal Learning Community、つまり、「国際的な『学び』の共同体」を目指すものとして命名され、2013年度に第1期生が入寮している。なお、本学では外国人留学生と日本人学生が共住する国際寮を40年以上前から有している。

4-2 建築空間

グローバル・ドミトリーは本学での78年間の寮体制の変遷を経て、人間教育の場とするだけではなくアットホームな環境を好む近時の学生の意識の傾向にも沿う形で考え出されたものである。創立当初の4人1部屋を単位とした形から、個室を中心とした寮体制への移行を経て、グローバル・ドミトリーは「部屋」を単位とした寮生活の利点と、「個室」中心の寮生活の利点とを兼ね合わせた6人の寮生から成るユニットを中心とした協同生活空間へと移行している(井出2014)。

ユニットは玄関で仕切られた独立した空間となっており、ユニット内は共有スペースのリビング、台所を挟む形で両側に個室が3部屋ずつL字型に配置され、個室の向かいにトイレ、洗面・シャワールーム、洗濯機・乾燥機室が設置されている。各フロアには4ユニットが四方に設計され、3階建ての女子寮は12ユニットで1棟を形成する構造である。寮内にはユニットを超えて交流ができるように共有スペースや多目的ルームも設けてある。現在、この構造のグローバル・ドミトリーは女子寮2棟、男子寮1棟(4階建)の計3棟である。

4-3 グローバル・コミュニティが目指す3つの「学び」

グローバル・コミュニティが目指す学びの1つ目は、寮というコミュニティを構成するユニット・メイト全員が主体性・自律心をもって共に解決し共に学ぶことである。ユニットでは、フロア・リーダー、ユニット・リーダーを中心に自分達で適宜ルールを考えて運用して

いくことが期待されている。2つ目は、コミュニティ・イベント「学び」のプログラムの実施である。寮生同士の交流や快適で充実した寮生活を実現するためにさまざまな「学び」のための企画が開催され、大学主催のリーダー教育や教員による講話、教職員によるセミナーや交流会などがある。3つ目は、留学生と日本人学生が共に生活することで日常的な生活を通して異文化と接し、国際的な感覚を身に付けていくことを大きな特色としている。

5. 対象者と調査方法

本調査では、本学に2013年9月から2014年8月まで在学し、グローバル・ドミトリーに入寮している22名（男性8名、女性14名：台湾13、韓国3、アメリカ2、ドイツ2、マレーシア1、ブータン1）を対象とした。年齢は20歳から29歳（平均22歳）である。この他、造りの異なる旧寮に入寮した留学生1名にもその違いを参考に目的でヒアリングを行った。調査協力者は交換留学生および別科生で数週間後に帰国を控えた学生である。調査期間は2014年7月18日～7月30日で、筆者の個人研究室にて1対1で45分程度の半構造化面接を行い、調査協力者の同意を得てすべての会話を録音した。日本語レベルは、初中級レベル2名、中上級～超級レベル20名で全員日本語教育センターの日本語科目を履修している。調査協力者には事前に調査用紙を記入してもらいそれに関連する内容について答えてもらった。全員が日本語での面接で問題ないと申し出たため、会話のやりとりはすべて日本語で行った。インタビューは主に（1）寮の生活全般、（2）寮で会話する機会、（3）寮での勉強、（4）日本語の授業と寮で使う日本語、（5）寮の運営、（6）寮での日本文化理解、異文化理解について質問し、調査協力者の経験や思っていることに意味付けをしながら自分の言葉で自由に話してもらった。また、質問方法は自由な発言を促すためにオープンエンドの質問をこころがけた。

6. 分析方法

面接（対面インタビューによる聴き取り）から得た言語情報は文字化し、大谷（2008、2011）によるSCAT（Steps for Coding and Theorization）手法を用いて分析した。寮生活における留学生の在り方の先行研究がまだ十分に蓄積されていないなか、変容する可能性のある人々の行為や語りを生きた文脈の中で理解しようとする本研究には質的研究が効果的と考えられた。質的研究の中でもSCATは比較的小規模の質的データの分析に有効であり、教育社会学、日本語教育を含む多様な領域で用いられていることから本研究にはSCAT

手法が適切と判断した。SCATは、言語記録を読み込み、それを表すような新たな概念を案出して「新しいコトバ」としての構成概念（construct）を作っていく作業である（大谷2011）。大谷（2007）では、SCAT手法を説明するのに、その手法的な背景となっている考えを、Glazar&Straussのグラウンデッド・セオリー、R.G.RagsdaleやJ.W.Schofieldの質的研究グループの方法、木下のMGTA（Modified Grounded Theory Approach）といった質的研究手法との関係を示している。

本研究では、面接から得られた発話を、文脈の中で一定の内容や意図したところで切片化（セグメント化）し、その結果得られた逐語録（テキスト）を次の手順で分析を行った。

- 〈1〉 テキストの中の注目すべき語句を書き出す
 - 〈2〉 注目される実際の語句をテキスト外で表現できる語句に変換する
 - 〈3〉 変換した語句を説明するテキスト外の変換する
 - 〈4〉 〈3〉から浮かび上がるテーマ・構成概念を記述する
- 最後に、〈4〉を結びつけるストーリー・ラインを作成し理論記述を導き出した。

7. 解析結果

調査協力者Aのインタビューのテキストを上記の手順で解析した結果を表1に示す。表1の解析例は、調査協力者Aから得られた36のテキストのうち最初の5つのテキストを抜き出したもので、5つのテキストから10つの理論概記述が得られた。

表1 SCATの解析例

番号	発話者	テキスト	〈1〉 テキスト中の注 目すべき語句	〈2〉 テキスト中の語 句の言い換え	〈3〉 左を説明するよ うなテキスト外 の概念	〈4〉 テーマと構成概 念
1	面接者	一年間の寮生活はどうでしたか。	一年間寮生活	寮生活の評価を問 う		
2	調査 協力者	色々な人がいて、最初は慣れてい ませんでした。日本語力が低かっ たし。例えば掃除に参加しない人 がいる、母語だとしてしないの か聞くことができる。でも、日 本語で聞くことができなから我 慢しました。ストレスはあまりあ りませんでした。	色々な人がいたた め慣れなかった。 日本語力が低い ため聞きたいこと が聞けない。 ストレスはなかつ た	文化背景が異なる 人々の中にいる違 和感、日本語力が 低い状態把握 ができないが、ス トレスとは感じな い	異文化への移行す る際のとまどい、 言語レベルによる 不自由さと普段と は違う状況の受入 れ	日本語力による情 報収集力の低下
3	面接者	今はもう色々聞けるようになりま したか。	色々聞くことが できる	日本語力はどう なったか問う		
4	調査 協力者	そうですね。はい、大丈夫です。	大丈夫	今は多くのことが 日本語でできるよう になった	日本語の不自由さ の低減	日本語での伝達力 の向上
5	面接者	さっき、掃除に参加しない人がい て、気になったと言いましたが、 今も気になることはありますか。	今はどうですか	共同体で気になる ことを問う		
6	調査 協力者	今は、ユニットの〇〇の決まりを 守らない人が1人います。私は先 輩の姿として、ルールを守らな ければいけないと言っています。同 じ中国語なので。そのときは、あ の人はごめんささいと言います… でもだめです。すぐもどります。 でも、ルールを守らないという一 つの事件じゃなくて、総合的にそ の人のことを見ます。だから、そ の他はふつうです。自然に友達に もどります。	ユニットの決まり を守らない人がい る、ルールを守ら なければいけない、 同じ中国語、 一つの事件だけで はなく総合的に見 る、いい人	共同体にはルール があり、共同体の メンバーはルール を守る義務があ る。ルールを守ら なくても人間関係 は崩れない	共同体を維持する ためのルール、メ ンバー同士で注意 しあうことで質の 高い共同体の実 現、人格否定の回 避	集団のメンバーと しての自覚、上下 関係、共同体にお けるルールと人間 関係の関係、人間 関係の構築
7	面接者	ユニット・リーダーからもその人 に注意するのですか。	リーダーも注意	リーダーの役割を 問う		
8	調査 協力者	リーダーは日本人っぽい人です。 あの方がルールを守っていないの を知っているのに、何も言いま せん。なぜ言わない、そういうとき に、何で言わない…だから、私か ら「言おうか」と言ってもいつも 「大丈夫」と言います。「言わな いで」と言って私を止めます。だ から、私も言いません。そのあと 、リーダーはLINEでみんなに 「注意しましょう」と流します。 日本人は直接言わない…その人の ことが分からないようにするため かな。	日本人っぽい、 知っているのに何 も言わない、大丈 夫と言う、私を止 める、私も言わな い、LINEでみん なに注意をする、 日本人は直接言わ ない、その人のこ とが分からないよ うに	日本人は問題が起 こっても何も言わ ない、自分がその 役をかって出ても 否定されたため、 その意図を理解し ようとする、日本 人の間接的な物事 の解決の仕方を不 思議に思う	自分のやり方とは 異なるやり方の受 容、他者の行動の 理解	日本人の文化的行 動観察、日本人の 文化的行動に対す る理解
9	面接者	Aさんは、このようなリーダーを どう思いますか。	リーダーをどう思 う	Aさんのリーダー 像について問う		
10	調査 協力者	僕がリーダーをして状況を変えたい と思います(笑う) 僕は国で寮のリーダーをしていま したから、そのときの経験が役に 立つと思います。 でも、ここは日本ですから… いいと思います。日本人はトラブ ルを避けますね、やさしいです。 いろいろわかりました。	僕がリーダーをす る、状況を変えたい、 リーダーの経 験が役に立つ、こ こは日本人、日本 人はトラブルを避 ける、やさしい	問題解決への意 欲、自分とは異な る物事の進め方、 居住場所でのやり 方を知る、日本人 に対する肯定的な 意見	問題解決への意 欲、経験に基づい た自信、一つでは ない問題解決の方 法。移行先の文化 の尊重、異文化を 理解しようとする 努力	異文化の人々の行 動を決定する要 因、異文化に対す る尊重、自分とは 異なる価値観への 理解

～調査協力者Aのここまでのテキスト数は全部で35	
ストーリー ライン (番号10まで)	調査協力者Aは、入寮当初は日本語力が低かったために国での情報収集力に比べ、情報収集力は低下し、我慢を強いられることもあったが、それはさほどストレスにはならなかった。その後、日本語力は向上したとしている。今はユニットで決められたルールを守らないユニット・メイトがいて、Aは先輩として、中国語で注意をするなど、ユニットのメンバーとして自覚を持って行動している。そんな中、リーダーと一緒にまたルールを守らないところを目撃し、リーダーに注意をするよう促すが、直接注意はしないでくれと頼まれたため、リーダーが言うことは優先すべきであるし、日本のやりかたに従ってみようとする。調査協力者Aは留学先である日本人の行動パターンや価値観を肯定的に理解しようとしていた。
理論記述 (番号10まで)	<ul style="list-style-type: none"> ・母語に比べて日本語力による情報収集力の低下を感じた ・日本語が向上し、その後ユニット・メイトに伝えたいことが伝えることができた ・すでに国で馴染んでいた上下関係の意識もあり、ユニットの環境をよくするために注意をするという行動をとる。この行為には集団のメンバーとしての自覚、共同体におけるルールを守るべきと考えている ・人を注意する行為に対し、日本人と自分の行動を決定する要因が異なる点を知る ・日本人の行動について観察し、それに対する理解を深める ・そして、移行先の異文化のやり方を尊重し日本人の行動パターンや価値観を理解しようとした
さらに追求すべき点、課題	注意するのは同じ留学生だからか、日本人に対しても同じ態度なのか？調査協力者Aがリーダーになったと仮定したら、日本における共同体で調査協力者Aはどのような言動をとるのか？

同様の手順で残りの21名の調査協力者のテキストからコーディングを繰り返し、それぞれ理論概念を導き出した。複数人から得た記述の分析をさらに進める手法として、加藤他(2014)、松井・中井(2010)では、各対象者で得た理論記述を統合してカテゴリー化を行い、最終的なカテゴリーについて分析、考察を行っている。本研究においても、これらを参考に、全調査協力者の関連がある理論概念を統合して新たに概念を案出する作業を繰り返した。その結果、次の5つの最上位のカテゴリー(以下、上位カテゴリー)を得ることができた。

- [1] グローバル・ドミトリーで得たもの
- [2] 寮のシステムによる影響
- [3] 共同体(寮コミュニティ)に対する認識
- [4] 異文化理解力
- [5] 自己成長・アイデンティティ更新
- [6] 日本語力

なお、本研究では、理論記述のカテゴリー化を3段階進めたため、上位カテゴリー>カテゴリー>サブカテゴリー>理論記述として示す(上位カテゴリーは[]、カテゴリーは《 》、サブカテゴリーは〈 〉で表す)。なお、2段階のカテゴリー化で終わらせた理論記述群もあり、その場合はカテゴリーを抜かし、上位カテゴリー>サブカテゴリー>理論記述で示した。また、本稿内で取り上げた調査協力者の記述文は、必要に応じて発言の意図を変えないよう留意しながら筆者が一部日本語を修正した。

以下、上述の6つのカテゴリーについて、調査協力者から得られた記述や全体数に対し何人の調査協力者が言及したかパーセンテージを適宜示すなどしながら結果を述べる。

7-1 グローバル・ドミトリーで得たもの

第1の上位カテゴリー「グローバル・ドミトリーで得たもの」では、〈家族のような人間関係・居場所の実現〉〈寮の利点〉〈寮環境の活用〉のサブカテゴリーが得られた。

調査協力者全体の32%が寮の人間関係を〈家族のような人間関係〉と感じ、このような人間関係を心地よい環境としていた。「おかえり、いってらっしゃい」「今日、何食べる?」といった家庭の中にあるような何気ないやりとりが心地よかったという意見やテレビを一緒に笑いながら見たことが楽しかったという意見が「ユニットは家族みたいでリラックスできた」というテキストに結びついたと考えられる。こういった関係を実現可能にしたのは、リビング、台所といった共有スペースが確保されているハード面とそこに集うことに価値をおいたメンバーがいたというソフト面の二つの要因が揃ったからだと考えられる。〈寮の利点〉についての記述は全体の32%で、このうち、上位3項が友達がつくりやすい(39%)、オン・オフが切り替えやすい(21%)、日本語が覚えやすいが(19%)であった。このうち、「友達がつくりやすい」では、キャンパスにおいてより1対1で友達になることができる、またその機会も多い、寮の話題など話題があるから話せるといった記述があった。また、寮だと時間に影響されずに様々なテーマについて話すことができる、という記述もあった。

7-2 寮のシステムが与える影響

第2の上位カテゴリー「寮のシステムによる影響」では、〈規則に対する違和感〉〈規則に従う意識〉〈大学が決めた寮運営〉〈設備の充実〉のサブカテゴリーが得られた。

82%が〈規則に対する違和感〉を示しており、そのほとんどが門限に関することであった。この規則にある程度理解を示しながらも、行動範囲が限られてしまうこと

や友人と過ごしている時に門限を理由に帰寮することに抵抗を感じるといった記述が多かった。次に多かったのが、男子寮、女子寮に分かれていて異性を寮内に入れられないことであった。その理由として、「私の国では人が成長する過程で異性を排除しては正常な成長ができないと考えます。異性の考えを知ることができないこの規則は弊害になると思う」「様々なバックグラウンドを持つ人が集まっている寮なのに自由に交流できないのもったいない」という記述があった。これに対し、ゴミの分別やゴミ捨て当番といった規則に対しては「従う意識」が働いていることが分かった。〈大学が決めた寮運営〉はリーダーの設置、留学生と日本人が半数ずつである利点などについて23%が言及した。日本人と留学生が半数ずつであることについては、「日本人3人、留学生3人はとてもいいです。どちらが多いとやり方や意見が偏ってしまうから同じ数は大事です」という記述が複数見られた。〈設備の充実〉はユニットの空間、設備に対する高い評価を示した記述は100%であった。

7-3 共同体（寮コミュニティ）に対する認識

第3の上位カテゴリ「共同体に対する認識」は、統合した結果の154の理論記述から構成され、6つの上位カテゴリの中で一番記述が多く、3段階でカテゴリ化を進めた。調査協力者全員がこのカテゴリに言及しており（理論記述総数の64%）、寮で生活することに対する認識の高さを示している。以下、カテゴリ《共同体の成員としての認識》《共同体での人間関係構築》《寮文化の継承》とそれぞれのサブカテゴリについて述べる。

7-3-1 寮に対する総体評価

寮生活について、87%が「よかった」13%が「ふつうだった」とし、よくなったとした調査協力者はいなかった。「よかった」の理由は、楽しかった、心地よかった、日本人と一緒に生活する経験はよかった、ユニット・メイトは優しくかった、設備が充実していて快適だった、であった。これらのよかったとする調査協力者のストーリー・ラインには、本人が満足するだけの日本人と話す機会があった、または他国の留学生との交流が十分にあったことを示す記述が90%認められた。

7-3-2 共同体の成員としての認識

1つ目のカテゴリは《共同体の成員としての認識》である。快適な共同生活をするために自分達で決めたルールを自他ともに守る重要性を指摘する記述は95%にのぼった。寮の生活で困っていることは何かという質問に対し、リビング、台所といった共有スペースをきれいに使用しないことを問題視したものが82%で多くを占め、自分のユニットはきれいで満足という記述は13%であった。留学生、日本人に関係なくユニットのルールを守らない相手には注意や助言した（41%）、

ルールが守られない場合はユニットのみんなに改善案を提示した（22%）といった記述から、〈自分達が主体となるユニット運営〉〈共同体の成員としての自覚〉〈状況改善に向けての行動〉のサブカテゴリが抽出された。一方で、注意するのはリーダーで自分はその立場にいなかったから注意はしなかった、恥ずかしいから注意はしなかった、といった記述が13%あった。

7-3-3 共同体での人間関係構築

2つ目のカテゴリは《共同体での人間関係構築》である。これは、〈留学生と日本人学生の平等な立場〉〈先輩・後輩関係〉〈人間関係構築の段階〉〈接触の機会〉〈日本人学生と接する方法〉〈日本人学生からのサポート〉〈人間関係構築に関する個人的な考え〉といったサブカテゴリから構成された。

寮内で〈留学生と日本人学生は平等な立場〉だったかという質問には、留学生だから、日本人だからということも理由に立場の違いや差別は感じなかったと調査協力者全員が答えている。一方、〈先輩・後輩関係〉については、寮には1年生から4年生まで在住しているため、学年による先輩、後輩の関係や、入寮した時期の先輩、後輩といった意識や言葉遣いの違いはあったとしている。日本人に限らず、留学生も年齢が上であれば先輩となり、年齢が下であれば後輩となっていたので日本人も留学生も同じように先輩・後輩の関係はあったとしている。先輩・後輩の文化についてはそれが異文化適応の弊害となったとする記述はなかったが、距離感を感じるという理由で違和感があるとする記述、逆に、国でもそうだったし規律は必要といった理由で違和感がないとする記述もあり、個々の文化背景の影響が見られた。

〈人間関係構築の段階〉では、日本語力の低い学生ほど情報収集と発信の量が少なく、「外国人だから何も言えなかったけど、2学期目に入って少し話せるようになった」というように自発的に発言できるまでに半年かかったとする記述から入寮してすぐ不自由なく話せたというものまで幅があった。ユニット・メイトと関係を構築するには接触頻度が重要と認識しており、その接触場面（リビング、台所、掃除の時間の順）との関連を示す記述が72記述あった。寮内での会話時間（接触時間）は一日平均30分～1時間（35%）、2時間（31%）、10分（26%）の順であった。さらに、「言いたいことを言わないのは留学生だからではなく、日本語力がないから。もっと日本語が上手になりたかった。でも日本人はアルバイトでいつも寮にいなかった、もっと話したかった、仲良くなりたかった」という記述に代表されるように、日本語に接する機会があるかどうかはユニットで一緒になったユニット・メイト次第という状況が浮き彫りになった。〈日本人からのサポート〉については、寮についての説明、書類等を一緒に読む、日本語のチェック、宿題、テレビや日常生活での日本語使用の解説と

いった日本語のサポートが82%と大半をしめ、生活習慣や日本文化の説明が続いた。「いつも笑顔でわかるまで聞いたり、話してくれた」という記述もあり日本人学生は忍耐強く留学生と向き合っていたことが窺える。ユニット内の情報共有の方法は、LINEが最も多く全員が使っており、その他、お知らせの掲示、ホワイトボードへの記入とあった。

〈人間関係構築に関する個人的な考え〉の категорияでは、健全な人間関係を構築するには、話し合う時間を持つことが重要、ルールを守ってくれないからといってその人のすべてが悪いわけではない、分かり合うには面倒でも双方の努力が必要、といった考えを示す記述が27%あった。また、牛乳や卵がなくなる、みんなで使う生活用品は気がついた自分がお金を出して買っているなどの記述もあったが、これらは寮生活の一部であり、話し合いで解決すればいいことと割り切っていた。こういった記述は、来日前に寮生活またはルームメイトがいる共同生活をした経験がある調査協力者が86%おり、すでにある程度の経験と心構えを持って寮生活を送っていたとも考えられる。

7-3-4 寮文化の継承について

寮の特有の文化を感じたことはありますか、という質問に対し、「人が入れ替わればユニットの雰囲気もルールも変わるので特有の文化はないと思う」と感じている調査協力者がほとんどであった。しかし、「前のリーダーのやり方がよかったのでそれを真似しながら自分らしさを加えて、今学期リーダーをしている」「今のリーダーは、昨年も私の国の大学からの留学生と一緒に住んでいるので私たちにどう接したらいいのかよく分かっている。私も後輩のためにリーダーに色々話している」「寮では、みんな『おかえり』『ただいま』『いっていらっしゃい』『お疲れ』といった挨拶を交わしていたので自分も言うようになってメンバーになったと感じる」といった記述からは留学生も寮文化を継承しながら共同体の一員になっていったことが分かる。

7-4 異文化理解・異文化適応

第4の上位カテゴリー〔異文化理解・異文化適応〕には〈異文化理解に対する態度〉〈日本人の行動観察・解釈〉〈異文化交流〉〈自文化との比較〉のサブカテゴリーから構成された。

7-4-1 異文化理解に対する態度

〈異文化理解に対する態度〉のサブカテゴリーは、調査協力者の27%から記述を得ることができた。「違う国(場所)なので、違う考えやルールがあるのは当たり前」「何でも聞くよりはまずは観察した」「間違った時はその理由を聞いて謝って直す」「一つの問題だけで判断するのではなく、総体的に見るようにしている」「実際に経験しないとわからない」「自分の考え方だけで見たら相

手のことを100%理解できない」「国に関係なく仲良くなる人とは仲良くなる」といった記述が得られた。これらの記述からは異文化理解に対して受容の姿勢が比較的できていると推察された。

7-4-2 日本人の行動観察・解釈

〈日本人の行動観察・解釈〉のサブカテゴリーでは、日本人のもつ対人距離感、日本人の行動の傾向、日本人の問題解決方法に関連する記述が37記述あった。代表的なものとして「日本語の言葉遣いが人間関係をつくると実感した」「日本人は他人に深い話をしないし、話す時間も短い。私の国の人より距離がある」といった距離感に対する記述や、「日本人は粘り強い、気が利く」「日本のやり方を押しつけられた印象はない」「日本人は何をしていてもルールを優先するところがある」「日本人とは相手の行動に関わる部分についてはなかなか話し合えない」といった文化に起因すると思われる行動に関する記述もあった。また、問題解決の方法については、「日本人は『これをやったら失礼になる』がとても多い。こんなことを言っていたらすべて『失礼』になってしまう。相手とのコミュニケーションがとれなくなってしまう」「直接言わない、ということが何か理解できた。私はダイレクトに言うけど、リーダーは『ちょっと言わないで』と私を止めてLINEでみんなに『きれいに使いましょう』と流した。みんなに言って、本人も分かるのが日本のやり方なのだと知った」という記述が挙げられる。

7-4-3 異文化交流と自文化との比較

〈異文化交流〉については、留学生同士の国についてニュース、料理、習慣などについて教え合ったとしている。〈自文化との比較〉については、友人関係を構築する難しさ、どこまで踏み込んで話をしているのかの不透明さ、日本人学生の幼稚性、日本人学生のおとなしさとといったことについて、対応に戸惑いを感じていることが窺える記述がみられた。

7-5 日本語力について

第5の上位カテゴリー〔日本語力について〕は、〈寮生活で向上した日本語力〉〈寮で使用する日本語と授業で学ぶ日本語〉のサブカテゴリーから構成された。

〈寮生活で向上した日本語力〉は、聴解力82%、会話力73%、流行語・世代語55%であった。一方で、授業で学ぶ日本語と寮で使用する日本語の関連はあまり感じられなかったとしている記述が82%(18名)を占めた。これを詳しく見てみると、この18名は主に中上級から上級前半レベルであった。この18名は日本語教育センターで開講している、学部で必要となる日本語力を身に付けることを目的とした日本語科目(アカデミック・ジャパニーズ)を履修している学生である。「授業では大学の授業で使う日本語を勉強していて、寮では日常

会話を使う。別のもの」とする記述が多く、「両方必要」としていることから、このレベルでは留学で日常生活のための日本語だけを習得することを期待しているわけではないことが推察できる。一方、中級前半の2名は日本語の授業で習ったことが役に立ったと記述している。このように、〈寮で使用する日本語〉は日常生活でのやりとりと答えている記述が大半であるのに対し、超級レベルの2名については、授業で扱った内容を寮に持ち帰って日本語で日本人や留学生と議論したとして、考えを深めていく過程でどういった日本語を使えばいいのか考えたり互いに直し合ったりして日本語の使い方が広がったという記述がみられた。

7-6 自己成長・アイデンティティ更新

第6の上位カテゴリー「自己成長・アイデンティティ更新」では、〈性格の変化〉〈伝達能力の向上〉〈自己の文化変容〉〈異文化接触時の対応力〉〈自信〉〈価値観の変化〉のサブカテゴリーより構成された。

「明るくなった」「積極的になった」「自分が期待する結果になる日本語が使えるようになった」「日本人のよいところを自分も身に付けたい」「相手に合わせて距離感が調整できるようになった」といった記述があった。また、「リーダーとして日本でも通用することがわかったので日本での就職に結び付けたい」「国にいるときは気の合う特定の人と付き合いさえいいと思ったが、タイプが違う人と付き合いが自分を成長させることがわかった。国では損をしていたと思う」といった気づきがある記述もあった。

8. 考察

以上の、上位カテゴリー、カテゴリー、サブカテゴリーから明らかになった留学生の実態について6つに分けて考察する。

1点目として、留学生にとって寮が自分の「居場所」となるには、いくつかの段階があることが示唆された。入寮はこれまでいた文化とは異なる文化での数々の接触となり、規則に対する理解と従う努力、日本人学生と生活する上で感じる違和感に対するコントロール、外国語による限られた情報量の中での行動の選択といったことが求められていることがわかった。入寮日にユニット・リーダーから受けた説明に対し「説明は半分ぐらいしかわからなかったけど安心した。それからは、わからないことはリーダーに聞いた」という記述からも受入れ側のサポートを得ながら寮に適応していった様子が窺えた。数か月経つと、日本人に交じって「いってらっしゃい」「どうしたの」「どうする」といった日本の家庭で交わされるようなやり取りが自然に口をついて出るようになっており、ユニットを「家族みたいだった」と表現するに

至っている。11か月の寮生活を終えるころには、留学生本人がユニット・リーダーとなっていたり、リーダー会議へ代理で出席したりユニットの在り方について相談を受けるなど頼られる存在となっているケースもあった。

2点目は、共同体の一員として行動することの重要性を強く認識していることである。多くの調査協力者が共同体の一員として責任ある態度とは、規則を守る、住居環境をきれいに保つことと考えていることがわかった。ユニット内で発生する問題の解決は日本人だけに任せずに、意見を言ったり改善策を提示したりしているケースも複数あり、留学生と日本人が「対等な立場」であることを留学生が感じとった結果、共同体の一員としての役割を果たすことにつながったと思われる。人間関係を築く上では、「Aさんは掃除をしないから困るけど、いい人だから友達です。これは別です。」というように掃除しない行為と友人関係を結びつけて考えていないことも明らかになった。調査協力者の一人からは、留学生と日本人の付き合い方について、本学の異文化理解関係のカリキュラムや留学生との交流を推進するキャンパスの環境が日本人寮生の態度にも影響しているのではないかという指摘があった。この調査協力者の言葉を借りれば、「麗澤大学の学生は留学生に好奇心を持っていないと思います、いい意味で。1人の人間として普通に接してくれるから私は楽だったし、そこから人間関係ができてきました」ということである。この指摘は、日本人側が留学生を特別視したりステレオタイプや偏見を持たずに接することができていると察せられる。こういった姿勢は通常の生活の中だけでは身に付きにくく、ある程度大学の授業で知識として身に付ける必要がある。異文化理解の基礎を日本人も留学生も大学でのカリキュラムで学んでおけば、実践的な場である寮において、より高いレベルからの人間関係が築ける可能性を示唆したものと考えられる。

3点目は、日本人または他国からの留学生との接触の機会が多く、交流内容の質がいいほど寮生活の満足度が高いことである。留学生は、日本文化社会の理解、日本語力向上を目指して留学してきており、寮においても日本人のやり方を理解しようとする姿勢を持つ、わからないことは日本語で質問して解決しようとしていることが記述から明らかになっている。しかし一方で、一日の日本人との接触時間を「10分程度」「あいさつ程度」としている留学生が30%いることも分かった。「ユニットの日本人はアルバイトで忙しくていつもいないから日本語を話す機会がなかった。1人だったから何もできなかった。私のユニットは運が悪かった」という記述もあり、日本人との接触が少ないために自分がイメージしていたほどは日本語力が上達せず、この点で不満を持っていたことも分かった。寮教育を強化するためには、こういった日本語に接する機会の不平等性は解決しなくてはなら

ず、日本語面のサポートをする担当者を置くなど何らかの仕掛けが必要だと思われる。

4点目は、1年という期間では日本的行動について理解できるものの、まだそれを行動に移すには至っていない状態であることが示唆された。日本人との距離感、日本人の問題解決のしかたなどには、「日本人のやりかたを理解しようと思います。でも、私は同じようにはできないと思います」というように、一定の理解は示しながらも違和感やとまどいを感じていることを示す記述がみられた。滞在期間が長ければ、日本人のやり方を試し内省して次の自分の行動を決めるという過程を踏む機会も得られると思われるが、生活習慣などを除き今回の調査ではそれらの過程を示す記述はなかった。

5点目は、日本語力によって寮環境の活用のしかた、周りから求められること、人間関係のネットワークの広がり方が異なってくることである。個々の性格もあると思われるが、日本語力が高いほど寮環境を活用する傾向は強く、自己変容を肯定的に自己評価する調査協力者が多かった。日本語の表現についても、「テレビで聞いた言い方を積極的に使ってみたら、相手の表情が少し変で反応も遅かったのを感じた。すぐにその訳を聞いて訂正してもらった。そのときに直してもらって使い方を教えてもらうのが便利です」など、知識だけに頼らず相手の反応を五感で感じることができ、間違いについて実践を通して改善しようとする態度もできつつあることが示された。日本語力の向上にともない、日本人や他の留学生と関わるができるようになり、自分の国にいたときよりも積極的になった、明るくなったと感じている調査協力者もいた。また、意識が高く日本語力もある一部の留学生ではあるが、授業で出された抽象的な概念や問題提起などについて日本語を媒体として夜遅くまで議論を重ねていたことも明らかになった。自分の国の政治、経済などにも話が発展したり、どう人生を生きるかといったことについても話が及んだとしている。こういったことが自主的にできるためには一定以上の日本語力が必要となってくる。言語能力のレベルと異文化社会適応への影響を考察した原田(2013)では、適応には日本語力のレベル群が関与することが示され、異文化社会への適応が円滑にされるためには、日本語力のレベル群別の助言や指導が必要となることが示唆されたとしている。また、日本の文化社会に適応していくためには日本語力の向上と共に留学生活での時間の経過が必要ともしている。

6点目は、生活の空間的構造が人間関係構築に影響することである。接触機会や接触時間が自然に得られるようにするには空間は重要であり、グローバル・ドミトリーはリビング、台所でそれらがある程度実現させていたと思われる。これに加え、留学生と日本人と同数にし、6人で1ユニットを構成させ自分たちでルールを作っていくといったことも仕掛けの一つだと思われる。

これは調和のとれた〔ルールの共有〕〔空間の共有〕〔時間の共有〕が友人関係を促進するという山川(2014)の指摘とも一致する。

学生寮の最大の特徴は、同じ年代の者が生活面でも学習面においても互いに刺激し主体的に学び合える空間であるということである。したがって、日常生活レベルの日本語力の活用に留まらず、生活の中でも知力(インテリジェンス)を育む知育の場として寮をどう活用していくのか、留学という限りある時間のなかで、教室に留まらない多様性のある日本語学習の機会の提供といったことが今後のテーマになると思われる。

9. まとめと今後の課題

本研究は、寮に居住をおいた留学生の寮生活の実態を明らかにし、そこから留学生に対する寮教育の可能性を探ることをめざした。その結果、1) 留学生にとって寮が自分の「居場所」となるにはいくつかの段階があり、日本人からのサポートを得ながら適応していること、2) 共同体の一員として行動することの重要性を認識していること、3) 日本人との接触の機会とその質が寮生活の満足度を左右する傾向があること、4) 1年という期間では解決方法といった文化社会行動の特徴が出やすいものに対しては理解でとまってしまう傾向があること、5) 日本語力によって寮環境の活用のしかた、周りから求められること、人間関係のネットワークの広がり方が異なってくることを明らかになった。また、これらのことから示唆される留学生に対する寮の教育的機能への提言としては、

- (1) 異文化適応段階を意識した日本人学生による生活的・文化的側面でのサポート及び教育的機能
 - (2) 日本語に接する平等な機会の提供と言語面でのサポート及び教育的機能
 - (3) 寮生活での自己の目標の設置や到達評価の確認を行うシステム
 - (4) 日本語上級者には学術的なテーマなどについて議論し合う機会の提供
- といったことが考えられる。

今後の課題としては、本調査結果は、調査対象としたグローバル・ドミトリーという環境で過ごした22名の対象者から得られた限定的に有効な結果であるため、研究調査の対象数を増やし引き続き調査を続けていく必要がある。また、今回は留学生を対象としたが、日本人学生の意識、異文化理解や留学生との生活面での適応過程についても明らかにすることで寮教育の全体像が見えてくるとと思われる。

注1) 文化的差異を個人が内面的にどうとらえるかとする異文化適応理論には、Uカーブ仮説(Lsygarrd1955)、W

型カーブ (Gullahorn&Gullahorn,1963)、異文化への5段階の移行 (Adler,1975)、異文化感受性モデル (Bennett1986) などがある。

注2) 本学にはA, B, C, D棟の寮があり、すべての棟をグローバル・ドミトリイとしているが、本稿では2013年に新築されたユニット制を導入したA, B, C棟を「グローバル・ドミトリイ」として取り上げる。

引用文献

- Allport,G.W. (1954) *The nature of prejudice*. Reading, MA : Addison-Wesley.
- Bryam,M. (1997) *Teaching and assessing intercultural communicative competence*, Cleve-ton : Multilingual Matters.
- 石井敏・久米昭元 (編集) (2013) 『異文化コミュニケーション事典』有斐閣選書
- 石井敏他 (2000) 『異文化コミュニケーションハンドブック』春風社
- 井出元 (2014) 「麗澤大学の学生寮—全人教育の理想」『麗澤教育』20,23-30
- 岩本廣美・細谷恵子 (2005) 「駄菓子屋の教育的機能—子どもと店員の関わりを通して—」『教育実践総合センター研究紀要』14,65-74
- 江淵一公 (1991) 「在日留学生と異文化間教育」『異文化間教育』5号,4-20
- 大谷尚 (2008a) 「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着しやすく小規模データにも適応可能な理論化の手続き—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』54(2),27-44
- 大谷尚 (2011) 「SCAT:Steps for Coding and Theorization—明示的手続きで着しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—」『感性工学』10(3),115-160
- 加藤智崇・杉山精一・牧野路子・内藤徹 (2014) 「長期メンテナンス受診患者における患者背景の質的解析」『日本歯科保存学雑誌』57(3),268-275
- ケイパー・マティアス (2008) 「異文化能力の概念化と応用—批判的再考—」立教大学院異文化コミュニケーション研究科修士論文

- 下田薫菜・田中共子 (2007) 「在日外国人留学生の感じる文化間距離—集団主義-個人主義、高-低コンテクストの観点から」『留学生教育』12,25-36
- 鈴木杏里・元岡展久・桂瑠以 (2012) 「女子大学大学寮における寮室と共用空間の構成」『高等教育と学生支援 : お茶の水女子大学教育機構紀要』2,14-21
- 高橋聡 (2012) 「言語教育における、ことばと自己アイデンティティ」『言語文化教育研究』10(2) ,37-55
- 田中共子 (2000) 『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』ナカニシヤ出版
- 田中共子・藤原武弘 (1992) 「在日留学生の対人行動上の困難—異文化適応を促進するための日本のソーシャル・スキルの検討—」『社会心理学研究』7(2) 92-101
- 竹内愛 (2012) 「『異文化理解能力』の定義に関する基礎研究」『共愛学園前橋国際大学論集』12,105-112
- 出口朋美・八島智子 (2008) 「実践共同体としての大学寮における留学生と日本人学生の対人関係」『多文化関係学』5,33-47
- 原田登美 (2013) 「言語能力のレベル差と異文化社会適応への影響：ホームステイをした留学生の日本語力は適応にどう関わるか」『言語と文化』17,241-268
- 原田登美 (2012) 「ソーシャル・サポートにおけるホームステイの有益なサポートと有益でないサポート—留学生から見たホームステイ評価」『言語と文化』16,155-188
- 中山理 (2014) 「グローバル人材を育成する国際寮『グローバル・ドミトリイ』」『麗澤教育』20,16-22
- 松井孝浩・中井雅也 (2010) 「小規模実践研究グループにおける実践の振り返り—参加教員へのインタビュー調査分析から—」WEB版日本語教育実践研究フォーラム報告
- 森邦明 (2013) 「大学の戦略と教育可能性に関する学生寮シンポジウムの報告」『福岡女子大学文学部・国際文理学部紀要「文藝と思想」』77,1-19
- 横山雅弘 (1991b) 「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化理解教育』5,81-97
- 山川史 (2013) 「寮に住む留学生と日本人学生の友人関係構築に関する事例研究」『異文化間教育』38,100-115